

日本 语言文化研究

第七辑

北京大学日本语言文化系 编
北京大学日本文化研究所



學苑出版社

日本语言文化研究

第七辑

北京大学日本语言文化系
北京大学日本文化研究所 编

學苑出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本语言文化研究. 第7辑/北京大学日本语言文化系,
北京大学日本文化研究所主编. —北京:学苑出版社,
2007.8

ISBN 978-7-5077-2927-6

I. 日… II. ①北…②北… III. 日本—语言学—文集
IV. H36-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2007)第 127775 号

责任编辑:韩继忠

出版发行:学苑出版社

社址:北京市丰台区南方庄2号院1号楼

邮政编码:100079

网 址:www.book001.com

电子信箱:xueyuan@public.bta.net.cn

销售电话:010-67675512、67602949、67678944

经 销:全国新华书店

印 刷 厂:河北金鑫印刷厂

开 本:850×1168 1/32

印 张:16.75

字 数:350千字

版 次:2007年8月北京第1版

印 次:2007年8月北京第1次印刷

印 数:0001—1500册

定 价:40.00元

本书的出版得到(日本)文教大学的资助,
谨致谢意。

《日本语言文化研究》编辑委员会

顾 问:孙宗光 徐昌华 潘金生 顾海根
编 委:刘金才 于荣胜 彭广陆 赵华敏
李 强 滕 军

本辑执行主编:李 强

本辑特邀主编:加纳陆人

编 者 的 话

北京大学日本语言文化系与(日本)文教大学文学部为纪念两校日语教学实习15周年,于2006年3月25日在北京大学举办了《纪念北京大学文教大学日语教学交流15周年学术研讨会》。在这次学术研讨会上,两校有共14名代表就日本语教育以及日本语言、文学、文化等研究发表了论文,并进行了学术研讨。《日本语言文化研究》第7辑就是以这次学术研讨会发表的论文为主编辑而成的。

本辑《日本语言文化研究》除了研讨会上发表的论文外,还收入了国内外学界同仁的19篇论文(其中有6篇是本系在读博士生和博士后的论文),共计32篇。需要说明的是:6篇本系在读博士生和博士后的论文均经过各自指导老师的认真审阅、并经过本人修改后才予以刊载的。

《日本语言文化研究》是北京大学日语系(北京大学日本文化研究所)主办的、用以展现本系教师教学科研水平和成果并同国内外学界进行学术交流。所以,她是开放性的,除了本系教师外,每辑都会刊载一定数量的国内外专家学者的文章和论文。这一期除了参加研讨会的日本文教大学的专家学者外,还有日本广岛大学外国语教育研究中心的李国栋教授、南开大学外语学院的王建宜教授、大连外国语学院刘利国教授、洛阳外国语学院的许宗华教授、华侨大学外国语学院日语系的黄庆法副教授和北京理工大学外国语学院日语系的赵秀娟讲师等给本辑的投稿。在此谨向以上各位表示衷心的感谢。我们相信在本系教

师的努力和国内外专家学者的鼎力支持下,我们一定能把《日本语言文化研究》办成展现本系教师教学科研水平和成果并与学界进行学术交流的重要文辑。

编 者

2007 年 5 月 30 日

目 录

基 调 报 告

グローバル時代の芥川研究

——世界文学入りした芥川龍之介…………… 関口安義 2

语 言 篇

戦時中の外来語は敵性語だったか

——戦時中の雑誌の用語調査から…………… 遠藤織枝 24

清末の日本語会話書『東語簡要』…………… 蒋垂东 70

关于日本对外日语教学语法系统的考察

——以『新版日本語教育辞典』为例…………… 彭广陆 83

把语言交际能力的培养放在大学公共外语教学的首位

——以《初级日语》(第一、二册)为例…………… 赵华敏 94

从数字看中日汉字的异同…………… 潘 钧 108

戦前厦門における日本語教育について

——厦門旭瀛書院を中心に…………… 黄慶法 124

助詞「まで」の意味用法と共起する言葉の制約

——空間・時間・数量の限定を中心に…………… 劉振泉 141

关于《雨月物語》中的汉字表记…………… 郭胜华 157

关于“识解”…………… 李奇楠 171

北京大学学生日语学习动机与自我认同变化

——从学习结果谈起…………… 马小兵 185

新漢語と中日語彙交流における研究の歩み…………… 孙建军 200

日、中、英三言語の色彩語彙に関する比較研究

…………… 王健宜、胡 進 211

语言过程说产生的历史背景…………… 许宗华 223

伝聞表現のニュースソースについて…………… 張 興 233

「断り行為」における否定的表現…………… 楊久成 248

文学篇

怨霊と文学——古今集注釈のはじまり…………… 紙宏行 264

厨川白村与《近代的恋爱观》…………… 李 强 276

《海与毒药》中的战争和人物塑造…………… 于荣胜 291

论黑井千次前期作品中的自我确认…………… 翁家慧 303

「心の鬼」をめぐる

——『源氏物語』の女君たちの情念…………… 丁 莉 315

日本“近代文学观”与“近代小说观”的形成

——兼论日本近代早期现实主义的产生及其意义

…………… 李国栋 336

日本战前无产阶级文学评论概观…………… 刘利国 352

挫折体验中的矛盾与背反

——试析夏目漱石反抗人格的原点…………… 赵秀娟 379

夏目漱石研究在中国…………… 高西峰 396

《道草》论——以“自然”观照人生…………… 程 静 412

文化篇

- 日本語廃止論と漢字——敗戦直後の議論…… 尾沼忠良 434
- 多文化を理解する双方向の学び場
——異文化間トランスの転機…………… 加納陸人 450
- 试论能乐的形成过程
——以观阿弥、世阿弥为中心 …………… 滕 军 470
- 藩主と民衆の伊勢信仰
——近世三河国吉田藩の事例を中心に…… 劉琳琳 479
- 试论柳田国男——繁华下的“孤寂” …………… 孙 敏 495
- 上田秋成国学思想的特质…………… 杜 洋 513

基 调 报 告

(研究会基調報告)

グローバル時代の芥川研究 ——世界文学入りした芥川龍之介

文教大学 関口安義

要 約 今日、芥川文学は世界四〇か国で翻訳され、研究も進んでいる。かつて欧米中心であった芥川研究は、今や東アジア、特に中国・韓国にシフトした感がある。中国では初の『芥川龍之介全集』全5集が昨年刊行された。韓国でも芥川への関心は、その歴史認識評価とともに高まっている。英語圏ではペンギン・クラシックス・シリーズに新訳による『「羅生門」ほか一七編』が入った。そうした現状を抑え、なぜ芥川かの問題を提起する。

キーワード 国際化 歴史認識 芥川再発見

内外で注視される芥川文学

皆さんこんにちは。ただいま紹介に与りました関口安義です。記念すべき日に、こうして基調講演の場を与えられましたことに感謝いたします。

そこで今日は、中国でも近年人気が高まり、本格的全集まで出るようになりました芥川龍之介の研究状況を、「グローバル時代の芥川研究」と題しまして話をしようと思います。

芥川龍之介といいますと、日本では長い間、厭世家の書斎人であり、腺病質の芸術至上主義者との印象がつきまといまいました。専門家による研究も、この見方から書かれたものが依然多いのです。その作品を取り上げても、——例えば

「羅生門」に〈エゴイズム〉や〈老い〉や〈滅びの予感〉を見、「鼻」に〈懷疑〉や〈諦観〉を読むというのが一般的でした。これらの批評や研究には、この作家が一九二七年七月二四日未明に、自殺という方法で自らの人生を閉じたというドラマが、必要以上にその作品理解に影を宿していました。

加えるに、ぼさぼさの髪、左手をあごに置き、相手をぐっとにらむかのような痩せた姿の晩年の彼の写真が、暗い作家のイメージ形成にあずかっていたのも事実のようです。こうした芥川観は、なにも日本にとどまらず、世界共通のものであったと思います。

けれども、近年日本におきましては、テキストに執着した新しい〈読み〉や伝記研究にめざましい進展があり、過去のお定まりの芥川像を打破することとなりました。芥川には若き日には、普通の若者同様、否それ以上の親しい友人関係があり、若さも明るさもあった、——作品にもそれは反映しているということです。特に新資料と周辺の人々をも押さえた伝記研究の進展は、人生にきわめて誠実な作家、芥川龍之介を浮かび上がらせることになったのです。

厭世家の芸術至上主義者という芥川神話の打破は、暗い芥川像からの離陸につながります。そうした中で彼のテキストの優秀性がクローズアップされ、日本では二〇〇三年からはじまった新課程による国語教科書『国語総合』二十種すべてに、芥川の「羅生門」が教材として登場しました。言うまでもなく各教科書会社が相談して決めたのではなく、期せずしてこうなったのです。高等学校への進学率が上昇し、準義務教育化した日本では、十五、六歳の少年少女は、ほぼ全員が芥川の初期作品「羅生門」を学ぶことになったのです。

この現象の背景には、冷戦構造の崩壊にはじまる内外の芥

川文学への強い関心、新資料の出現、それに伴う研究の進展がありました。これまで、とかくイデオロギー優先の作品の〈読み〉や作家評価がつきまとった国々でも、芥川は受け入れられるようになったのです。冷戦後、人間の内面の問題が重視され、文学評価も変わったといえるのでしょうか。

ポスト冷戦期、グローバル時代を迎え、芥川龍之介が世界各国で注目され、ここ中国でも本格的な『芥川龍之介全集』全五巻が刊行されています。この全集に関しては後ほど詳しく述べたいと思います。

そうした人々の芥川への関心は、どこにあるかと申しますと、人間にまつわる矛盾・不条理・束縛・妖怪・悪魔など、そのかかえこむテーマの魅力にあるのです。また宗教、特にキリスト教に生涯を通して深く接した芥川文学は、世界文学になる条件を備えていたと言えましょうか。イデオロギー一辺倒の作品評価ですと、こういう側面は斬り捨てられてしまい、いま申し上げたような、人間にまつわる矛盾・不条理・束縛・妖怪・悪魔性、それに宗教の問題は、浮上しません。

けれども世界に受容理論 (reader response theory) が浸透し、日本語が世界各国で学ばれるという時代を迎え、いまや、芥川龍之介の文学は、日本という地理的空間、日本語という言語空間を越え、全世界人に注目され、再評価・再発見されようとしているのです。

ペンギン叢書に登場した芥川 —英語圏の芥川

そのいくつかの例を申しましょう。ペンギン・クラシック・シリーズ、——これはイギリスのペーパーバック叢書ですが、この一冊に『羅生門ほか一七編』という新訳によるアンソロジーが入り、今春刊行されます。ペンギン古典叢書に

入る最初の現代アジア作家が芥川龍之介であったことは、芥川再評価・再発見の象徴的出来事と言えましょう。

訳者はハーバード大学の俊英ジェイ・ルービンさんです。訳書巻頭には、村上春樹のかなり長い序文がついています。わたしはそのグラ刷りを頂いていますので、すでに内容に目を通しています。

ここには今回はじめて英訳された「尾形了齋覚え書」「おぎん」「忠義」「葱」「馬の脚」「大道寺信輔の半生」「文章」「子供の病氣」「点鬼簿」など、九作品を含んでいます。これらは過去いずれも英訳が敬遠されてきた小説です。訳者のレイ・ルービンさんは、昨年四月号の日本の雑誌『新潮』に、この英訳の仕事にもふれて、「芥川は世界文学となりうるか?」という一文を寄せ、「なぜ、芥川龍之介か」という課題に答えていますので、ちょっと紹介しましょう。

ルービンさんは、芥川作品を新たに英訳すること、それは「大いなる再発見の旅」であったといいます。彼は大学院生のころに小島巖の英訳を通して芥川作品にふれていたそうです。現在は村上春樹の英訳者として、また『村上春樹と言葉の音楽』という著書をもつ研究者としても著名な方ですが、そうした彼にペンギンの編集者の読み巧者サイモン・ウィンダーが、「芥川を新しく訳出してそれに村上の序文をつけるという案」を打診してきたのだというのですね。

サイモン・ウィンダーという編集者は、芥川の新しい英語訳を提供する時期が来ているのを認識しているわけですから、やはりすごい。どんな名訳、——すぐれた翻訳も、古びて行くという宿命は免れません。英語圏では1951年のベネチア国際映画祭で、黒沢明監督の「羅生門」がグラン・プリを獲得した以後、六〇年代にかけて芥川作品の翻訳は「洪水」のように出現しました。あれから五十年、半世紀を

経て、現在は新たな翻訳の時代が訪れているというわけです。

ジェイ・ルービンさんは、芥川が日本語の達人であったことを十分認めた上で、「その作品は書かれた言語から剥ぎとられるという横暴を生き延びる。無比の創作手段であった日本語から切り離されても、芥川の思考とイメージ、その登場人物たちは生命を失うことがない」と書いています。これは大事な指摘ですね。日本語による表現で、日本の読者だけに理解される小説では、世界文学になる資格はありません。そうした点を押さえて、「芥川はエキゾティックな舞台意匠を提供することで外国の読者の耳目をひきつける。しかし最終的に読者の心を満たすのは、人間という家族の一員であるがゆえに分つことのできる経験の数々なのである。こうした特質は芥川を疑いなく「世界文学」作家の地位に就かしめるだろう」ともルービンさんは言うのです。

ここにグローバル時代、ポスト冷戦期の芥川受容の一因があります。イデオロギーの眼鏡で芥川作品を見ない、日本語という枠を越え、「最終的に読者の心を満たすのは、人間という家族の一員であるがゆえに分つことのできる経験の数々」こそが、芥川を「世界文学」の地位に就かせるとは、冷戦後人々の関心が、人間の心の問題へと向かったことともかわるのでしょう。

ペンギン・クラシック・シリーズの『羅生門ほか一七編』は、第一部「退廃する世界」、第二部「剣の下に」、第三部「現代の悲喜劇」、第四部「作者自身の物語」の四部構成をとっています。おもしろい構成です。

第一部には「羅生門」「藪の中」「鼻」「龍」「蜘蛛の糸」「地獄変」の六作品を収めます。日本語による〈芥川龍之介作品集〉の多くは、執筆時期を配慮し、刊行年月日順に作

品をならべますが、このペンギン版の芥川アンソロジーは、「執筆時期による年代順ではなく、小説の舞台となった時代による年代順」という配列を採用しています。それによって巻頭には「羅生門」と「藪の中」が来て、読者はこの本が黒沢映画「羅生門」の原作だと知って、アンソロジーを手取るのです。

言うまでもなく、「藪の中」が映画「羅生門」の直接の典拠であるからです。余談ですが、日本では「真相は藪の中だ」というようにいいますが、欧米、特にアメリカでは、黒沢映画「羅生門」の影響で、真相をめぐる互いに矛盾する見解を含んだ状況を、「ラショーモン」というのだそうです。たとえば「西八十四番街のラショーモン」といった具合です。お解りでしょうか。そういうこともあつての18作品の配列はなかなか有効です。

ジェイ・ルービンさんが、第一部で、否、全章で最も高く評価するのは、「地獄変」です。彼の「地獄変」評価の箇所を紹介しましょう。

「地獄変」は、破滅的な結末にいたる過程を華麗な行文によって表現する点においてほとんど歌劇的とさえ言いうるが、よく計算された語り手の口調のおかげで、歌劇につきものの大げさな金切り声を免れている。「堀川の大臣」の年老いた家来は抑制を効かせたコメンテーターであると同時に、読者が推測する真相を否定することによって否定と不安にはさまれた緊張感を持続させ、そのままクライマックスの炎に突入するのである。芥川が眼に見えるようにつぶさに描く平安後期の世界——衣装、建築、牛車の作り、陰影の調和、そしていうまでもなく、地獄をこの世に彷彿とさせるめくるめく大紅蓮——は彼の文章の最高の到達点を示す。もし芥川の

作品の中でただ一作だけ残るとすれば、それは「地獄変」に違いない。

的確な作品評です。わたし自身も昨年「「地獄変」の虚実」という作品論を書いて、本作を高く評価しました。「地獄変」はいまや洋の東西を越えて、芥川の最高傑作として正に位置づけられるようになったかのようです。

第二部「剣の下に」には、「尾形了齋覚え書」「おぎん」「忠義」の三作品が収録されています。この三作品は、先ほど申しましたように、英語での最初の訳（First time in English）なのです。これまでどうして英訳が敬遠されてきたのか詳細はわかりませんが、今回の英訳の試みは立派です。

「尾形了齋覚え書」と「おぎん」は、いわゆる切支丹ものであり、訳者のことばでいうなら、「敬虔な信仰と強圧的な幕府とのあいだに板ばさみになった庶民の姿を描く」ということになります。これらは英語圏の読者にも迎ええられる作品であると思います。

「忠義」は、「家」をめぐる主従一主人と家来の関係に光を当てた小説です。日本ではこれまでと、かく過小評価され、芥川作品中の位置づけも低いものでした。一時代前の優れた芥川研究家吉田精一氏は、「「家」を主とし「人」を従とすべき封建時代に於て、「人」を主とし「家」を従としようとした一種のヒューマニズムが、却つて「家」の滅亡を招いたといふ解釈を付与してゐる」という見方を示し、この論調を受けて勝倉壽一氏は、「「主」中心主義を貫いて破滅する宇左衛門のヒューマニズムへの作者のシニカルな眼と、修理発狂の描写の迫真性」から「作者の暗い人生認識と懐疑的精神」や「自己の存在基盤への原初的な強い不安の影」を読み取っています。

このような〈読み〉に対し、わたしはいま一人の家老、